

画竜点睛を欠く

キトラ日記 (フィクションです)

これは、8世紀に生きた壁画絵師の日記である。

○月●日 今日、親方から大切な仕事を任せられた。先ごろ身罷られた皇子様をお納めする石室の天井画を描くのだ。ここには、旅立たれる皇子様が道に迷われることのないよう、道標として正確な天文図を描くのだという。任せられたからには、全力を尽くし、皇子様をお見送りしたい。

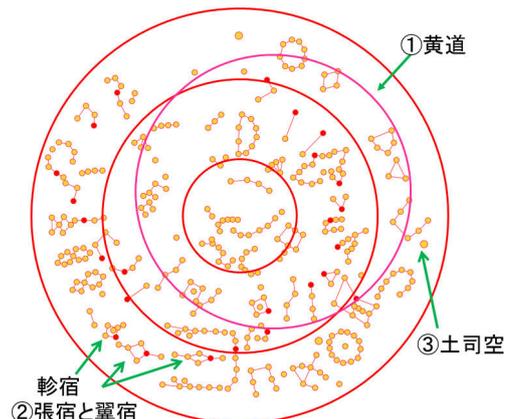
○月▲日 今日は、天文図を描くベースになる緯度線を描くことにする。漆喰で白く塗られた天井の中心に天の北極を定め、ここを中心にコンパスを用いて赤道、外規(地平線)、内規(周極星のライン)の3つの円を正確に描いた。さらに黄道の極を別に定めて赤道と同じ半径で黄道を描いた。予想に反して作業は順調に進み、昼過ぎには赤い線で4つの円を描くことができた。ところが帰りしな、石室側面にすでに描かれている四神や12獣神の配置と私の描いた4つの円を見比べていて不審なことに気がついた。本来なら黄道の極を虎の方角に定めるべきなのに、なんと、90°異なった亥の方角に中心点を置いてしまっているではないか。これではその後の作業が難しくなる、というか、致命的な問題だ。さて困った。親方に頼んで白壁を塗りなおしてもらおうか。いや、こんな失敗、思いつき怒鳴られた拳句に給金を減らされるのがオチだ。そもそも星の位置さえ正しければ、黄道など大きな問題ではないだろう。ここは誰にも言わず、作業を次に進めよう。それで良いのだ。

○月■日 今日は、天文図の星座の下絵を描くことにする。星座の形は、昨日までに手本となる粉本を見ながら念紙(和紙の裏にベンガラを塗ったカーボン紙のようなもの)に書き写してある。あとは、この念紙を天井の正確な位置に押し当てて先の尖った棒でケガくと星座線が転写されるという塩梅だ。私は弟子から1枚ずつ順番に手渡される念紙を使って星座をなぞり、作業は淡々と進んでいった。今日も楽勝だ。作業を終え、全体を眺めると我ながらなかなかの出来である。そうやって悦に入っていると、ふと星宿の配置が気になった。これはいかに。なんと、張宿と翼宿の順番が逆になっているではな

いか。さて、どこで取り違えたのか。だいたい、この2つの星宿は、隣どおしにあって、形もほとんど同じである。これでは間違えてもしょうがない。それだけではなく、良く見ると、その隣の軫宿も傾いてしまっている。どうもこのあたりで集中力が途切れたようだ。ま、しかし、この程度、誰も気づくことはないだろう。さすれば、ここは黙っておいて作業を次に進めよう。大丈夫だ、きっと。

○月▼日 今日は、天文図の星に金箔を貼付する作業を行う。金箔は大小2つのサイズがあって、大きな金箔は3つの輝星に貼付するのだ。金箔は貴重品なので1枚たりとも失敗することは許されない。もっとも、すでに粉紙による転写作業で星の位置は記されていたので、貼付は単純作業で順調に進んだ。そして最後の1枚を張り終えて満足感に浸りながら悦に入っていると、妙なところがあるのに気がついた。大きな星の1つである土司空(くじら座β)の位置がおかしいのだ。単独星は念紙で転写した星座の配置から見当をつけて個所を特定し貼付していたのだが、どうも何かを間違えたらしく、本来の位置よりずいぶん東側にずれてしまっている。これは困った。貼り直しも利かないし、よりもよって大きな星を間違うとは。でもまあいいか。南方からの渡来人の話によると天倉の南の地平線の彼方には「あけるなる」という明るく輝く星があるという。だから決して間違いではないのだ。これで正しいことにしよう。

○月◆日 今日、石室が閉じられ、皇子様を見送る最後の儀式が恙なく終了したという。私の描いた天文図も石室とともに封印された。これで秘密は永遠だ。……ほんとかな。



脚注 今回のストーリーは、キトラ天文図の星の配置の謎がすべて絵師のミスであるという筋書きで組み立てました。もとより、これらの謎は、何か奥

深い理由があるのか、はたまた頓着されていなかったのか、それともミスなのか、まだ解明がされていませんので、あんまり真に受けないでくださいね。

キトラを見に行く はじめて観に行きました

去る8月に、キトラ古墳の壁画の公開展示がありましたので、奈良県明日香村の「キトラ古墳壁画体験館・四神の館」に出かけました。

明日香村は、我が家からほんの2時間弱で行くことができる古代史の聖地なのですが、約50年前に学校の遠足が何かで行ったきりで、その頃はまだキトラ古墳はおろか高松塚古墳でさえ本格的な調査が行われておらず、野原の中にある石舞台古墳を訪ね、大した感慨もなく見たことだけおぼろげなに記憶している程度の印象でした。

今回初めて訪れたキトラ古墳は、1983年に石室内で彩色壁画が発見され、社会的に大きな注目を集めた墳墓で、その石室の天井には本格的な天文図、壁には四神や十二支が描かれているということで、私も当時の無関心から一転して、ぜひ見たいと思うようになり、今回の公開を機に久しぶりに出かけることができました。

今回の展示に出かけたことで、キトラの天文図について一層の興味がわきましたし、まだ、いろいろと秘密が隠されているようで、これからも調べていこうと思っています。



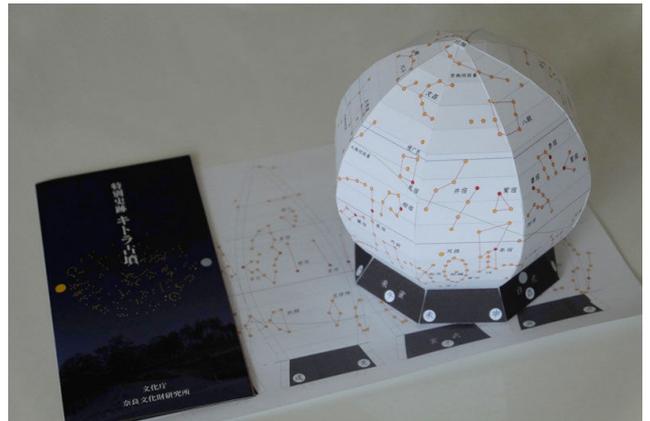
キトラ天球儀をつくる 実際に形にしないと見えないもの

キトラの天文図は天の北極を中心とした正距方位図法に近い形で描かれているので、特に南天の星は東西に引き伸ばされていたりして、実際の星空でどう見えるのか、イメージがわきにくいところがあります。そこで、キトラ天文図の恒星の座標を読み取って過去に作った星図のプログラムに落とし込み、キトラ天球儀を製作しました。（今回製作したのは通常为天球儀ではなくて星図は反転していませんが）

完成した天球儀を手にとって眺めまわしてみると、想像以上に実際の星空との関係がよくわかり、1300年の時を遡った星空を感じることができました。例えば、南天の星座は、星座の形自体は実際の見たままとし、星座と星座の間隔を広くして描かれていることや、歳差により季節の星座の見える高度が違っていることなど、いろいろと気づ

くことができました。

以前（2015年6月）に天象列次分野之図という古代韓国で作成された星図のことを紹介して、キトラ天文図との比較もしましたが、改めて比較すると発見することがいろいろです。



編集後記

今回は趣を変えて、気まぐれにフィクションを書いてみました。荒唐無稽な話を考えるのは好きなのですが、文章にするのはなかなか機会がありません。

ちなみに、一連のネタの出所は、「キトラ古墳天文図星座写真資料」（奈良文化財研究所）と、「古代

の星空を読み解く」（中村士）なのですが、ここまでひどい書きようではありませんので念のため申し添えておきます。

たまにはこういったことも楽しいです。

Kz_Wada 和田一人 Kazuto.wada@nifty.com